

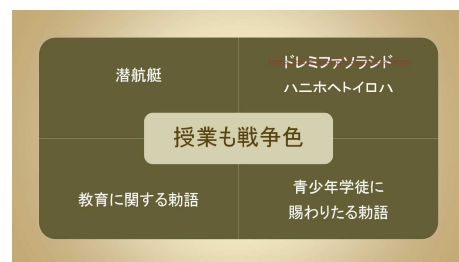
学校の授業は、12年の日中戦争を境に大きく変わります。

11年入学的場秀子さんは「勉強は漢字の書き取りくらいだった」、12年入学の吉中富枝さんは「雨が降ると勉強を教わった」と言われています。さらに、15年入学の東旭男さんや山口りつ子さんによると、「ほとんど授業はできなかった」「学ぶというより作業が多かった」ということです。



授業の内容も戦争の色合いが強くなります。

13年入学の中尾駿一郎さんは、「川をせき止め、『潜航艇』などと称して水練を教わった。シンガポール陥落の時、『昭南島』と呼ぶようにとゴムまりを1つもらった」、山中一代さんは、「5、6年生の頃、音楽の楽譜はドレミではなくハニホヘイロハだった」と記されています。



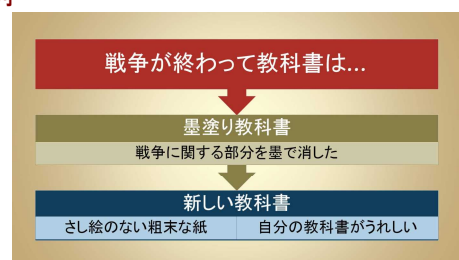
14年入学の下谷豊藤さんと東完爾さんは、「軍国主義の教育で、男子は軍人になることを教育された」「教育に関する勅語、青少年学徒に降り賜りたる勅語の暗記をした」、18年入学の松塚昌久さんは「毎日朝礼があって、教育勅語を暗記して一斉朗読した」と記されています。

17年入学の大東愛子さんは「教科書は上級生の人の古い本を借りて勉強した」、山崎美智子さんは「3～4年生の頃から教科書がなく、兄弟や親類から借りていたが、私は借りる人がなく、学校では見せてもらっても家で勉強できなくて大変困った」、18年入学の鳥殿勝美さんは「ノートや鉛筆が不足していた。教科書は上級生の古い本を借りていた」、13年入学の山中一代さんは「習字の時間には半紙の大きさに切った新聞紙に何回も紙が重くなるほど書いて、最後に先生から白い紙を1枚だけもらい、失敗すれば代わりがないので緊張しながら書いた」と、教科書や学用品の苦勞を記録されています。さらに、19年入学の大西君子さんは「学校で配給のくじ引きがあった。くつなどが当たった人は喜んでいましたが、私はいつも何も当たらなかった」と記されています。



20年8月15日に戦争が終わり、教科書にも変化が表れます。

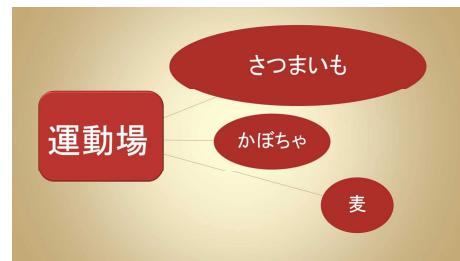
19年入学の倉林秀和さんは「教科書の所々に墨を塗って消した」と、戦争に関する部分を墨で消した「墨塗り教科書」の記憶を記



されています。

17年入学の草尾喬子さんは、「終戦後、教科書がザラ半紙で綴った薄い本になった。上と下に分かれていて、さし絵も何もなく粗末な本だった」と新しい教科書について書かれています。同じく17年入学の山崎美智子さんは、「5年生になって、うすっぺらな本とはよべないような教科書をもらった。1人ずつもらえた時は、本当にうれしかったのを思い出す」と書いてくださいました。

運動場を畑にしてサツマイモを作ったと書いてくださったのは、13年入学の山中一代さん、14年入学の下谷豊藤さん、15年入学の東旭男さん、山口りつ子さん、16年入学の山口泰二さん、17年入学の大東愛子さん、18年入学の小林安子さん、鳥殿勝美さん、松塚昌久さん、19年入学の山口美智男さんです。イモ以外にも、下谷さんは麦を、東さんはカボチャを作ったと記憶されています。



17年入学の大西正弘さんは、「上級生はわらじ、ぞうり作り、高等科男子は松ヤニ採りをしていた」と記されています。わら草履作りについては、15年入学の山口りつ子さん、16年入学の山口泰二さんも「習った」と書かれています。松ヤニ採りについては、12年入学の杉本成子さんが「油を作るため、山へ松ヤニを採りに行った」、18年入学の鳥殿勝美さんが「上級生と山へ松ヤニ採りに行った」と書かれています。

炭焼きをしたという記録もあります。11年入学の的場秀子さんによると、「17年18年は炭作りをした。山から木を運び、神社の近くで炭焼きをした」ということです。12年入学の杉本成子さん、13年入学の山中一代さんも「学校で炭焼きをした」と記録され、17年入学の大東愛子さんは「高学年の人が炭焼きをしていたので木運びの手伝いをした」と書かれています。

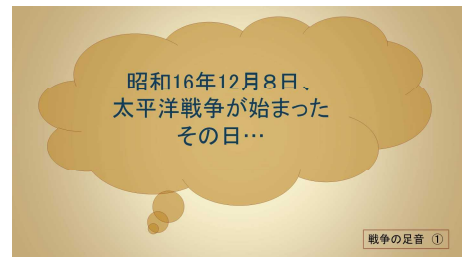


9年入学の山本ヒデ子さんは、「高学年になると、毎日のように兵隊さん送りに並松小学校まで行った。兵隊に行ってください家の掃除、庭の草引き等の手伝いをした」、11年入学の藤田一郎さんは「日の丸を持って下部神社に集まって、出征する兵隊さんを送った」、的場秀子さんは「6年の時は兵隊送りでいっぱいだった」、18年入学の松塚昌久さんは「下部神社境内では、毎日のように兵隊

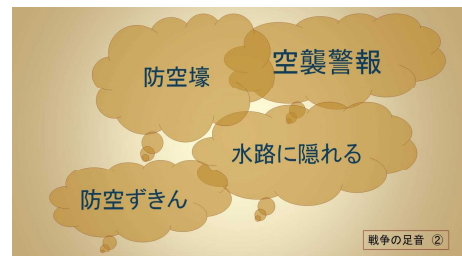


さんの武運長久を祈願して、日章旗を手に兵隊送りをした」と記録されています。また、17年入学の大東愛子さんは「兵隊に出征される時はお見送りし、戦死して帰られる時は遺骨を迎えに行った」と記されています。

昭和16年12月8日、日本がアメリカと戦争を始めた日のことです。13年入学の中尾駿一郎さんは次のように綴られています。「4年生の12月8日、コマ回しの操作を誤りガラスを破損、職員室の片隅に立たされていた。日本軍の真珠湾奇襲攻撃、太平洋戦争突入をラジオが報じると、先生方は大興奮。『鬼畜米英撲滅』『皇国の興廃この一戦にあり』『八紘一宇の精神の涵養』などと叫ばれていた。夕刻遅くまで放置されていた私は、尿意に耐えられず濡れていた。」



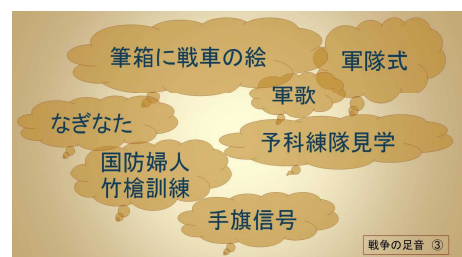
大東さんと小林さんの記録によると、運動場の隅にある大きな木の所に防空壕が掘ってあったそうです。16年入学の草尾静子さんは「空襲警報が出たら防空壕に入った」、17年入学の大東愛子さんは「空襲警報が鳴り響くと全員が入った」、18年入学の小林安子さんは「空襲警報が出たら防空壕に走り込んだ」と記されています。それが、19年入学の人になると、杉本廣二さんは「授業中であっても空襲警報のサイレンが鳴ると、上級生の人と家まで走って帰った」、中部哲也さんも「授業中にサイレンが鳴ると、家に帰った」と書かれています。戦争末期になると、空襲警報が出た時の避難の仕方が変わったようです。



19年入学の松村茂美さんは、「毎日、運動場にあった防空壕に避難する訓練をしたり、登下校の途中敵の飛行機に見つからないように物陰や道路脇の溝に隠れる練習をした」と記されています。

登下校に関しては、18年入学の小林安子さんが「通学路で水路の中に身を隠したこともあった」、19年入学の大西君子さんが「帰り道、飛行機が飛んできたら草むらに寝たりした」、19年入学の中部哲也さんが「登下校中でも空襲警報のサイレンが鳴ると、いつも持っている防空ずきんをかぶり、水路にうずくまった」と記録されています。

11年入学の藤田一郎さんは「5、6年頃から軍隊式になった」と書かれています。13年入学の中尾駿一郎さんは「ブリキ製の筆箱には勇ましいな戦車が描かれていた」、17年入学の中谷修三さんは「軍歌を大声で歌いながら歩いていた。上級生は絶対的な権限が



あり近づきにくい感じだった」と記憶されています。また、中谷さんによると、「4年生の時、丹波市の予科練隊を見学するため行軍した」そうです。9年入学の山本ヒデ子さんは「高学年になるとなぎなたを習った。エイヤーと大声で気合いを掛けて習った」、17年入学の大西正弘さんは「運動場では国防婦人の方が竹槍を持ってヤーヤーと槍を突いていた」、大東愛子さんは「城山の頂上と運動場で手旗信号の練習をしておられた」と記録されています。

家でのからしはどうだったのでしょうか。

8年入学の中森健彦さんは「秋の穫り入れ時は、屋にもみの天日干しをひっくり返したり、下敷きを巻いたりした。稲運びも多かった。家の手伝いの主なものは、水くみ、子守り。手伝いのため一緒に遊ばず、くやしい思いをした子ども多くいた」と書かれています。

子どもたちはとてもよく手伝いをしました。8年入学の中森初子さんは「かまどでご飯をたいたり、お風呂を沸かすための枯れ木を拾いに行った。お風呂へ水を汲んだりした」、9年入学の山本ヒデ子さんは「よく田んぼの手伝いをした。秋は学校が終わるとすぐ田んぼへ行って、稲を持ってはだしで運んだり、稲を刈ったり、お月様が上の方へ来るまで手伝った」、10年入学の岡田文代さんは「学校から帰ったら子守と夕ご飯炊き」、17年入学の大東愛子さんは「学校から帰ると弟や妹の子守り、夕方はバケツで井戸より風呂水くみを手伝った。田植えや稲刈りの手伝いもよくした」、18年入学の鳥殿勝美さんは「学校から帰ると井戸から風呂水、炊飯の水くみをした」、小西桂司さんは「水汲み、杉葉拾いなどの手伝いをした」、中部哲也さんは「弟や妹の子守りをよくした」、山口美智男さんは「風呂の水汲み、子守りなどをした」と教えてくださいました。

電気のことを書いてくださった方もおられました。

9年入学の山本ヒデ子さんは「家に1個の電気は20燭の光しかないのに、暗い光の中で姉の二人で勉強した」、10年入学の辻谷和之さんは「電灯は家に2、3灯しかなかった」、13年入学の山中一代さんは「電灯は夜しかなかったので、夕方暗くなるまで外で遊

2-4 戦争中の家庭生活

2-4-1 くらし

水くみ(風呂・台所)

枯れ木・杉葉拾い

田植え・稲刈り

子守り

子どもたちは、よく手伝いをした

夜しかなかった

灯火管制

家族が集まって

1つだけ

暗い光

1つの電灯で家族が過ごした

んでいた」、17年入学の大西正弘さんは「夜は灯火管制があった」、大東愛子さんは「電気は1軒に1灯だったので、1個の電気の下で火鉢に火を起し、家族全員がそこに集まって子どもは勉強、母は針仕事、父はわらで草履や炭俵を作っていた」と記録されています。

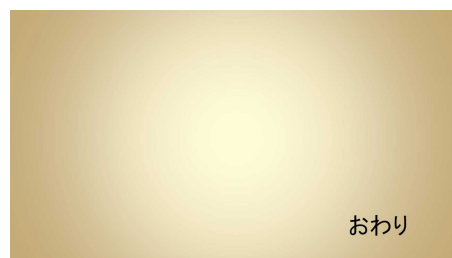
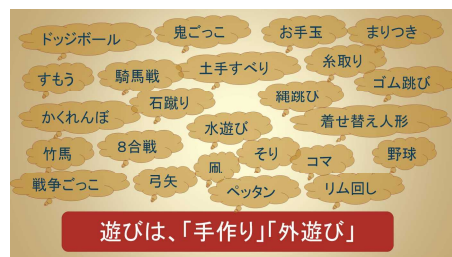
食事については、食べるものが少ない状態が続いたようです。

10年入学の辻谷和之さんは「おかずが1～2品と麦飯、米飯のみ」、11年入学の藤田一郎さんは「食べ物米3割、麦3割、かぼちゃ、いも類を食べていた。昭和19年～25年頃まで米不足」、的場秀子さんは「麦ご飯に大根など家で作った物ばかりだった。おやつは家で作ったおまんじゅうやかき餅やきりこもあった」、12年入学の杉本成子さんは「家が農家でありながら供出するため米がなく、いもや野菜を主食として食べた」、14年入学の東完爾さんは「食糧難で、甘い物はなかった」、15年入学の東旭男さんは「くらしは貧しく、白いご飯はほとんど食べる事ができなかった。麦飯、おかゆ、ぞうすい。魚や牛肉はなく、ほとんど野菜ばかり」、山口りつ子さんは「麦ご飯、代用食、おじや等を食べた。甘味料も自家製の物」、16年入学の草尾静子さんは「米は供出されるので、ご飯はカボチャ、芋や麦を入れて食べた」、山口泰二さんは「麦ご飯、代用食、野菜を食べた」、17年入学の大西正弘さんは「イタドリ、ツンバラ、クロンボ、芋、大きな南瓜ばかりで、手のひらが黄色になった」、大東愛子さんは「友だちと山へくり採りやイタドリ採りに行っておやつにした。おやつは豆を煎った物やかき餅、いもなど」、山崎美智子さんは「食べ物がなく、おやつは柿やイタドリ、アキハゼなどだった」、18年入学の小林安子さんは「食べる物がなく麦飯と芋類だった」、鳥殿勝美さんは「芋、芋蔓、麦飯、粟、きびだんご、芋のお粥を食べた」、松塚昌久さんは「白米のご飯は正月とお祭りだけ。普段は麦ご飯、おかゆ、芋がゆだった」、19年入学の大西君子さんは「サツマイモや南瓜などを毎日食べた。南瓜の種も煎って食べた。イタドリなどもよく取って食べた」、倉林秀和さんは「おかゆ、麦、南瓜、いもが主食だった」、中部哲也さんは「お菓子はなく、南瓜やサツマイモ等がおやつだった」、松村茂美さんは「芋や麦ご飯、粥などの粗食だった」と振り返っておられます。

戦争中、子どもたちはどんな遊びをしていたのでしょうか。キーワードは「手作り」と「外遊び」です。



8年入学の中森健彦さんは「女子はお手玉、まりつき、ゴム跳び、男子はドッジボール、魚つり、土手すべりなどをした」、中森初子さんは「縄跳び、かくれんぼ、鬼ごっこ、石蹴り。山へ登り、花を摘んで帰ったりした」、9年入学の山本ヒデ子さんは「お手玉、縄跳び、かくれんぼ、押し出しをして近所の子と仲良く遊んだ」、10年入学の辻谷和之さんは「雨の日はコマ回しをした」、11年入学の藤田一郎さんは「男は戦争ごっこをしていた。高学年の女子はなぎなたの練習をしていた」、12年入学の吉中富枝さんは「晴れの日鬼ごっこ、雨の日はお手玉をして遊んだ。男の子はペッタン」、13年入学の中尾駿一郎さんは「竹とんぼ、水鉄砲、弓矢、竹馬など、自分で作って遊んだ。運動場の片隅に屋根をもつ立派な土俵が作られ、相撲を取っていた」、14年入学の下谷豊藤さんは「外での遊びが多く、鬼ごっこ、ドッジボール、騎馬戦、相撲等をした。魚釣り、魚すくい等の川遊びも多かった」、東完爾さんは「帽子取り、騎馬戦、棒倒し」、15年入学の東旭男さんは「竹馬、縄跳び、ベッタ、コマ回しをして遊んだ」、山口りつ子さんは「お手玉、かくれんぼ、鬼ごっこ、縄跳び等をした」、16年入学の草尾静子さんは「糸取り、お手玉、かくれんぼ、縄跳びをした」、山口泰二さんは「自転車のリムの輪回し、鬼ごっこ、ベッタン、かくれんぼをした」、17年入学の大西正弘さんは「凧揚げ、弓、竹馬、竹とんぼ、木そり作り、リム回しをした」、草尾喬子さんは「お手玉、折り紙で着せ替え人形を作ってジャンケンで勝った者が好きな形の人形や同じ色を寄せ合うゲーム、石蹴りをして遊んだ」、中谷修三さんは「学校から帰る途中で兵隊ごっこの遊びがつい本気になる、血を流したこともあった」、平城久さんは「8合戦、野球、そり滑りなど、手作り道具で遊んだ」、18年入学の小林安子さんは「かくれんぼ、石蹴りなど外遊びが多かった」、鳥殿勝美さんは「竹馬、そり、水砲、山登り、カルタ、コマ回しをして遊んだ」、19年入学の大西君子さんは「まりつきやてんちゃんで遊んだ」、倉林秀和さんは「鬼ごっこ、かくれんぼ、ラムネ、コマ回し、ベッタン、野球等の遊びに明け暮れた」、小西桂司さんは「川魚、トンボ採り」、中部哲也さんは「」、山口美智男さんは「田んぼのススキでかくれんぼをしたり、ペッタン、竹馬、木登り、川遊びをした」ということです。戦争の影響を受けながらも、自分たちで遊びを作り、精一杯生きていたことが分かります。



※全編DVDに記録されています。

4 おわりに

多忙は言い訳に過ぎないが、今年度の6年生は行事参加に明け暮れた。じっくり腰を据えた取り組みはできなかった。したがって、地域学習のための基礎資料的なまとめ方に徹した。細部を切り取れば、そこから新たな展開が考えられる。他日を期したい。2年の間にお世話になった方の中には、故人になられた方も病に倒れられた方もある。「戦前・戦中」の取材は、ほぼ限界に来ている。

学校を開く、地域に開かれた学校という表現がある。「いつでも学校へどうぞ」みたいな漠然としたイメージがあるが、ちょっと違うようだ。私は今、学校を開くというのは学校が地域に出向くこと、学校が地域にアプローチすることだと感じている。逸話を2つ。

春先に、遺族会と老人会の方たちにアンケートをお願いした。役員さんを通じて届けてくださった方が多かったが、何人かの方が学校へ持参してくださった。ある老婆は、新築から20年経つ校舎に初めて入ったと、戸惑いながらも少女のように話してくださった。戦争中の写真をとお願いしたら、わざわざアルバムからはずして大事な写真を貸してくださった方もあった。

地区の忘年会の酒席でのこと。宴が終わりに近付いた頃、父と同窓であったその人は戦争体験を語り始められた。国民学校高等科を19年3月に卒業した時、徴兵検査があったらしい。半強制的な志願兵として海軍に採られ、東海地方で訓練を受けたそうだ。氏曰く、村で最後の兵隊だそうだ。しごきの厳しさも相当なものだったらしいが、戸田で機銃掃射の攻撃を受けた話はその場の空気が凍った。戦闘帽の顎紐を止めている金具に弾が当たり、帽子が吹っ飛んだそうだ。生死を分けた1、2センチの偶然だ。敗戦がもう少し先であれば、氏は特攻兵になっておられたのだろう。その氏が、しみじみ言われた。故郷を発つ前、特攻に出る先輩が村の上空で旋回し、氏は日の丸を振った。1回目は通り過ぎ、2回目に操縦席から顔を出し手を振られた。「あの時の情景を今も思い出す。」と。一校区の中に漂っている「戦前・戦中」の空気が、長らく閉ざしてきた扉を開いたような気がする。

IV エピローグ

母校で2年を過ごし、地域学習の可能性と限界について考えている。私自身の感覚としては、これまでの地域学習とは明らかに違う地平を開いたと思っている。同時に、私という存在が、職場の中で少し違う位置にあることも自覚している。2年間の取り組みは地元だからできたのか。前任校で同様の取り組みはできたか。

――この問いは、取り組みは一般化できるかという問いと同じだ。この職場が最後と決めている私には検証できないが、今後につながる何らかのヒントを残せたらと思う。

取り組みにあたって、地域史や文献などの活字資料を可能な限り集め、整理した。その上で誰に取材すればいいかを決め、取材内容を具体化してから出会いを設定した。その結果、「期待はずれの出会い」は皆無だった。取材対象を研究した上で出会いを。――これは、これまでの反省も込めた教訓だ。

自分の生まれ育った地域だから、取材対象もまた愛しい。教師が好きだと、子どもたちもとことん好きになっていく。地域の人たちは、そんな子どもたちを温かく包んでくれる。出発は、教師が地域を好きになることにあるようだ。――これもまた、身をもって感じた教訓だ。

本稿のタイトルは、「地域を記録し、遺す」とした。「遺す」ことの意味を考えたい。地域は、時が経てば人も風景も変わる。ある時空を切り取って遺すことは、地域の共有財産になる。昨年度のDVDが多くの人に受け入れられたのはそのためだ。記録し、遺し、発信する。――地域学習の意味と意義はその辺にあるように思う。

本稿で紹介した

2010年度 5年 「地域遺産はやま」

2011年度 6年 「戦争と吐山」

については、DVDがあります。ご覧になりたい方はご連絡ください。